



JIC インフォメーション

第 162 号 2010 年 4 月 10 日

年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F

TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪オフィス: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-1-22 フェアステージ大手前ビル 5F

TEL: 06-6944-2315 jicosaka@jic-web.co.jp

ロシア・旧ソ連
国際交流誌

ロシア旅行の季節到来!

<http://www.jic-web.co.jp>



<ロシア最大の蚤の市 ヴェルニサージュ (モスクワ)>

「ロシア留学のすすめ -ことばの環境・ことばのカー-」
JIC ロシアセミナー講演録 (大阪) 林田 理恵・・・2-5P
「過去へのまなざし、未来へのアプローチ
～現代ロシアの人気作家たち」
JIC ロシアセミナー講演録 (東京) 沼野 恭子・・・6-9P

<連載>「エクメネの最果てへ」-サハ共和国 冬の旅-
岡本 健裕・・・10-13P
ロシア情報・・・14-15P
JIC 情報・・・16P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会) 会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

JIC ロシアセミナー講演録 1 (2009 年 11 月/大阪)

「ロシア留学のすすめ -ことばの環境・ことばのカー-」

～後編～

林田 理恵 (大阪大学教授)

昨年 11 月に行われた大阪大学教授・林田理恵先生による JIC ロシアセミナー。2 月号に引き続き、今回はその後編をご紹介します。

ことばを習得するには？

単語や文法だけでなく、文化的背景やことばの持つイメージまで理解するとすると、かなり大変です。ことばはどうやって習得したらいいのでしょうか？ これが次の大きなテーマです。どう思いますか？



(参加者) - 「場数を踏むしかないでしょうか」

いきなり核心に近い答えが出ましたが、その通りですね。これはすごく大事で、これだけで今日の話を終わってもいいくらいです(笑)。レジュメには一般的に想定されるであろう答えを列挙しておいたのですが、例えば「単語を覚える」。受験勉強でも「でる単」「でる熟」とかありましたよね。覚えた語彙が何か役に立ったかということ今でも疑問ですが、とにかく単語を覚えて語彙を増やせばいいという学習方法があります。「文法規則を覚える」、「文型を覚える」というのもあります。このあたりは大学の語学授業の中でも相当議論になります。それからもう少し違う角度から「たくさん本を読む」という答えもあるかもしれません。先ほど答えてもらった「場数を踏む」というのもこの延長線上にあります。「映画をたくさん見る」というのもそうです。冒頭に、9 月に 10 日間と先日 2 日半ほどロシアに行ってきたと言いましたが、テレビがとても面白くなったと感じました。これまでは忙しかったのもあって、ロシアでテレビを見る暇もなかったのですが、今回はたまたまロシアのメインチャンネルをずっとつけていたのです。面白いことに、2 日目よりも 3 日目、3 日目よりも 4 日目と、だんだんよく聞こえてくるのです。長い間大学でロシア語を教えてきて、もうさすがに進歩はないと思っていましたが、テレビをつけっ放しにして、音のシャワーをずっと浴びていると、何を言っているかだんだん分かってくるのです。これも場数を踏むことのひとつだと思いますが、音声に触れていくというのがかなり大きな意味を持つということを自ら実感しました。

どうして場数を踏むことが重要なのかを、言語学の観点から少しお話してみたいと思います。人間というのは他の動物

と違って特別な存在ではあるのですが、やっぱり基本的にはいろいろな生物、動物、そしてサルや猿の延長線上にあるのです。サルは集団で行動します。多くの動物は集団で生活しています。しかし家庭の犬とか動物園のオランウータンは、たいてい 1 匹で飼われています。オランウータンは 1 匹で檻に入れられているとうつ病になるそうです。犬も 1 匹で飼われるとほとんどが精神障害を起こしているそうです。本当ですよ。何が言いたいかというと、群れで生きる生き物というのは、群れで生きるということが非常に大事だということです。群れで生きることによって一匹(一人)ではできないことを、共同作業で克服しているのです。結局、共存すること＝種の法則で、共存できなければ人類終わりなのです。私たちが共存するために何をしているかというと、普段あまり意識していないのですが、お互いのサインを雰囲気として受け取りながら、ことを回しているわけです。例えば、私は今こうやって適当に話しているように思われるかもしれませんが、実は皆さんの表情を見ながら「あ、眠そうだな」というサインを受け取りながら、状況に合わせて話の内容を少しずつ変えてしゃべっているのですね。これが新米教師にはできない。学生が寝ていようが携帯が鳴ろうが、準備したものを 1 時間半の授業時間でびっしり読むことしかできない。そうすると全く一方の授業になります。そこでは「同調」が起こらず、お互いがディスコミュニケーションを起こしてしまいます。人々は生活の中でお互いのサインを上手に受け取りながら、何でもどんなレベルでも上手に軌道修正をやってコミュニケーションをとっているわけです。

ちょっと脱線しますが、発達心理学の分野で面白い話があります。赤ん坊は普通どういう風に抱きますか？赤ん坊の体を前に向けて「これが私の子供よ！」と言わんばかりに抱く人はあまりいません。普通は自然に抱え込むように抱きますね。これは、お互いのサインを上手にやりとりするための動物としての自然な構えと言われています。赤ちゃんもお母さんもお互いに顔がきちんと見えるように、つまり、お互いがサインを上手に出し合えるような構えを自然にとっているのだそうです。赤ん坊がことばを覚えていく過程にもお母さんのサインが深く関係しています。例えば赤ちゃんが



「ほー！」とか「はー！」などと発声したとします。それに対してお母さんが喜び、反応します。赤ちゃんはお母さんが喜んでいて反応を通してそのサインを受け取ります。そこで「これを言ったら喜んでくれたから、もっと言ってみよう」となるわけです。このやりとりが繰り返されることによってそれまで意



味をなさなかった発声が、だんだん発語に、つまり人間のことばに近い状態になっていきます。お母さんは赤ん坊の言葉を発達させようと思って反応しているわけではなく、単に自分の思い込みで勝手に反応して

いるだけなのですが、それを受けた赤ん坊は「こういうことがやりたいときにこう言えばお母さんがうまく反応してくれる」ということがだんだん分かっていきます。そういうやりとりがすごく大事なのです。昔から「這えば立て、立てば歩めの親心」と言いますが、これも同じです。這って泣きわめいていた子供がハイハイができるようになる瞬間は、親にとってとても嬉しいものです。親は理性で考えているわけではなく単純に嬉しくて「わあ〜」と喜ぶのですが、この「わあ〜」ということによって、赤ちゃんはその反応をキャッチし、結果的に子供の次への歩みを促すことにつながっていくのです。赤ん坊が幼児へ、そして子供、大人へと成長する過程で周りの反応がいかに大きなものかということは、最近の発達心理学で大変重要視されています。何が言いたいかというと、私たちはまわりのサインを見ながら、まわりに合わせていくということをしながらかんたんしているということです。実はそこにディスコミュニケーションを回避する大きなキーがあります。

相互作用＝相手のサインを読みあうこと

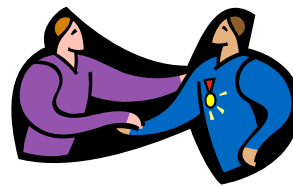
すでに述べたように、ことばには非常にアバウトな意味が貼り付いています。私が A ということばを A' というイメージを持って発したとすると、そのことばを聞いた人は A' ではなく、もしかしたら A'' というイメージで受け取るかもしれません。そこにディスコミュニケーションが起こる可能性が大いにあるのですが、実はそれを回避するための手段というのが、このお互いのサインなのです。ことばだけではなく顔の表情やしぐさ、もともと持っている相手についての蓄積された情報などがあります。同じことばを発しても、状況が違えば全く違う意味になることがよくあります。例えば外に出た息子がすぐに戻ってきて玄関口で「お母さん、雨！」と言ったらどう受け取るかと言えば、「傘をとってほしい」ということになります。しかし、大きな窓が開いていたとすればそれは「窓を閉めろ」というサインかもしれません。気象予報士が「明日は雨です」と言ったら、それはどうしてほしいということではなく、単なる情報としての雨ということになります。要するに、その時の状況やその人の情報、表情、しぐさなど、それらはすべてことばを理解するためのサインであって、私たちはそのサインを

知らず知らずのうちに受け取りながら、相手が言っていることの真意を理解しようとしているのです。

最近注目されている M. バフチンというロシアの 20 世紀の言語学者・思想家は「意味は・・・話し手と聞き手とが行なう相互作用の効果である」と言っています(『言語と文化の記号論』、1980 年)。意味というのは自分が発したイメージがそのまま相手に伝わるわけではない、すなわち音声は耳を介して入ってくるけれども、音声に伴って現れるイメージは人それぞれなので、そのイメージがきちんと伝わるために相互作用＝お互いのサインの出し合いがあって、そのサインを通して「こんなことが言いたいのだな」と、相手のことを思いなして理解を成立させているということです。つまり、いろいろな意味を含むアバウトな記号であることばが、相手のサイン、これをアフォードといいます。このアフォードによって特定の意味を作り出しています。アフォードのもとになるアフォードンスという概念、実は理系の複雑系科学からきたことばなのですが、ありとあらゆるものが相手にサインを出して、そのサインをお互いがうまく処理することによってすべてが成り立っている、という考え方です。これを言語学の観点でアプローチすると、先ほどの説明のようになります。

「他者の内なる『私』への視点」、「私の内なる『他者』への視点」(増山真緒子『表情からことばへ』)、これがあるからお互いの理解が成立するということなのですが、自我というのは、自分の中にもう一人の自分がいるから成立しています。自分を見ている自分がいるから自分を分析できるわけです。同様に、相手の視点に立って見ることによって、はじめて相手の言っていることの真意を理解することができます。

同じようなことを L・ヴィゴツキーという学者も言っています。



「思考はことばで表現されるのではなく、ことばの中で遂行される」(『言語と思考』、2001 年)。この言葉の意味は、実は私たちはあらかじめ考えていることを話し

ているのではなく、相手の反応を受けて話を軌道修正しながら自分の考えをまとめているのだということです。これにはもっと大きな意味合いもあります。ことばの意味は、人間が成長するとともに、あるいは時代の変化とともに、どんどん変わっていきます。ことばの習得は、実は母語であっても幼児段階で終わるわけではありません。生活が変わってくるとことばも変わっていくし、意味も変わっていく。使われなくなることばがある一方で、どんどん新しいことばが生まれ出てきます。普通のことばでも、自分が知っていることばがある限定された意味だけだったのに、次の経験を経ることによって新しい意味が加わるということが常に起こっています。そういう風に、たとえ母語であっても、脳が働いている限りことばの習得に終わりはなく、ことばの意味もどんどん変化していくことが言われています。

「場数を踏む」ことで言語習得は進む

場数を踏むということの落とし所がだいぶ分かってきました。ディスコミュニケーションを避けて、相互理解に持っていくのは、その「場数」、つまり対話の中ではじめてでることであって、相手のサインとの相互作用があつてはじめてできることだということです。そういう対話を積み重ねていくと、あることばについてこういう意味だと思っていたものが、いろいろな経験をしたり、見聞きしたりすることで意味も変わっていきます。これはすべての異言語の学習にも当てはまります。場数を踏んで相手との話の中で色々な情報を得ていくことによって、以前はこういう意味だと思っていたものが実は意味がズレているな、違うなということが分かってくるということです。



これは紙の上の勉強だけでは分からないことです。文法書や単語帳を読んでも分かりません。経験の積み重ねがとても重要です。当たり前のことですなのが、これらはつい最近注目されてきたことです。オーラルコミュニケーションが重視された授業というのは、実は最近のことなのです。悲しいかな、大学でも英語以外の言語教育はまだまだ遅れています。相変わらず単語や文法規則を覚えさせて、その後は教授の趣味で選んだ歴史書とか文学書を訳して終わりというようなことがまかり通っている悲しい現実があります。しかし、それではいくら経っても、一定の規則ごとには分かって、その言語を実際に自分が使うというところまで持っていくことはできません。例えば車の運転免許。学科の試験だけで免許が出るとしたら怖いですね。実技の練習があつてはじめて車はスムーズに安全に動かせるわけです。ところが、その当たり前の話が語学教育には一切適用されてこなかったのです。要するに、単語や文法を覚えるのは学科試験です。そこでいきなり教授の趣味で選んだ書物を出してこられて、学生が全くお門違いの訳をしたとしても、それは当たり前のことです。どういう背景で、どういう意味合いの中で書かれたのかということなしに、単語と文法だけで訳せというほうがムチャクチャなわけです。

繰り返しになりますが、人間の最も標準的なあり方というのは、共同体内でのやりとり・相互作用の中で絶えず軌道修正をしていて、その中に本当の意味でのことばの使用というものがあるということです。「でる単」「でる熟」を他から切り離していくら覚えたとしても、それは人間の認知機能としては非常に特殊で全く不自然です。そうではなくて場数を踏む、現場に出ていく、これが重要だということです。Aというこ

とばを相手にぶつけると反応が返ってきます。何かおかしいと思います。自分は A というイメージで言ったのに、相手は全く違う C というイメージで理解している。これは相互交渉の中で初めて分かってくるところです。ある概念のことばを自分で実際に使ってみて、それに対して相手の反応があつてはじめて、こうではないんだな、こうなんだなということが分かるわけです。

「単語＋文法」も大事。大人には大人の習得法がある

ここまでの話で、ことばを使って活動するということが言語習得の基本だと分かったと思います。ですから、現地へ行くことがいかに重要かということになるのですが、ただし、「単語＋文法規則」も重要でないわけではありません。

大人と子供の言語習得の違いについて考えてみます。よく「子供は言語習得が速い」と言われていますが、実は速くないのです。赤ん坊は生まれたあと周りの大人からの色々なサインを受け取りながら発語にもっていくまでにどれくらいかかりますか？早い子で 1 年、遅い子だと 2、3 年かかります。それでも一語文です。さらに複雑文までいくには中学生くらいまでかかります。つまり 10 年以上です。決して速くないのです。何故かというと、学校に進めば多少の学習活動もありますが、普段は経験や周りからのサインだけでやっている、しかも全くゼロ状態からやっているからです。ところが大人の言語学習の場合、例えばロシア語だと、大学に入ってからわずか 4 年間で複雑文のかなり高度なところまで理解し、使うようになれます。どうしてできるかという母語のベース、母語の論理力をすでに持っているからです。母語をベースにして、基本的な単語と文法規則をきちんと覚えこめば、理解は非常に早く



進むのです。教科書に書かれた概念を短時間で頭に入れてしまつて、それから場数を踏みに行くほうがはるかに効率的です。だから大学 1 年生くらいで留学したいという学生も時々いるのですが、私は「もう少し待った方が良い」といつも言っています。これは私の実体験でソ連時代の話ですが、私も留学をしました。大学のロシア語学科で 4 年間、つまり文法や単語はある程度やった状態で行ったわけです。そうすると 1、2 か月ほどで耳が聞こえてくる、そして半年くらいで基本的なことはしゃべれるようになる、ということが起こります。ところが、その当時まだロシア語学科がなかった東海大学の学生さんが全くのゼロ状態でモスクワ大学に派遣されていました。そうすると私たちが半年ほどで到達するレベルまで行くのに大体 2 年くらいかかっていました。やっぱり大きな開きがあります。先日のペテルブルグ滞在で同行した大阪大学の副学長がこんな話をしていました。彼は大学院時代をクリーブランドかどこかで過ごしたそうですが、もともと理系の方で、英語は苦手でほとんどゼロ状態で留学に行ったそ

うです。当然しばらくは全く話せなかったそうです。滞在 3 年目に突然しゃべれるようになったと言っていました。ですから「単語＋文法規則」も馬鹿にはできません。ベースの知識はすごく大事です。ただ、それだけではだめだということです。

言語学習の新しい流れ＝複言語主義

今ヨーロッパで「CEFR(Common European Framework of Reference for Languages)」が注目されています。ヨーロッパは EU 圏(加盟 27 カ国)の国境が無くなり、通貨もユーロに統一されて、人々の移動が非常に活発になっています。こちらで職がなければ別の国に行き働くということが頻繁に



起こっています。そのような中で、実生活の必要性に迫られて、コミュニケーションを確立するために作り出された言語基準のようなものが CEFR です。どんなものかという、これは「私はこの言語についてはこんなことができる」というポートフォリオ(評価書)、言い換えれば自分の言語史ノートみたいなものです。CEFR は 6 段階に分かれています。その分け方は、複雑文ができるとかいった文法基準ではなく、例えば「職を得るための自己アピールができる」などの実用ファンクションによって分けられています。「簡単な挨拶ができる」、「簡単な買い物ができる」というレベルから始まって、例えばイタリア人なら、イタリア語は最高レベルの 6、だけどギリシャ語は 6 段階の 2 くらいまで、ロシア語なら 1 かな、といった感じで自分のポートフォリオの中に書いていくわけです。それも自己評価ではなくてきちんとした試験がヨーロッパで行われています。留学経験のある人は知っていると思いますが、ロシアでも同様に ТРКИ と呼ばれる 6 段階のレベルを計る試験があり、CEFR に対応しています。現在ロシアでは、ТРКИ で 3 番目のレベルに合格すれば、ロシアの大学に入学できるレベルであるとみなされているようです。CEFR の精神は、活動中心のアプローチ、つまり、その言葉を使ってどこまで社会的活動ができるのかということからその人の言語能力を評価していこうという精神です。CEFR は自分の言語レベルをはっきりさせるためのものですが、自分のこれからの言語学習プログラムを組んでいく指針にもなるだろうと思います。

最後に CEFR の中で言われている「複言語主義」(plurilingualism)について少しだけ説明しておきます。耳慣れないことばですが、これまで外国語を学ぶといえば、母語話者並みにきれいな発音で話せるようになるとか、母語話者と同レベルになるということを目指とする人が多かったように思います。「でも実は違うよ」というのが複言語主義です。EU の中ではとりわけそうなのですが、どんな言語にも優先権を与えず、とりあえず皆が使える範囲内で各言語を話して、結果的にコミュニケーションがとれたらそれで良いという

のが複言語主義です。どういうことかという、実は大阪大学の外国語学部のロシア語教員の中ではすでにこの複言語主義を実践しているのですが、ロシア人の教員と話をすると、私たちは日本語で話をします。彼らはもちろん日本語が分かるのですがロシア語で話します。どっちかに合わせるということではないわけです。長年ロシア語に携わってきてもやはり母語は母語、私が自分の一番言いたいことを一番はっきりと言えるのは母語です。ですから母語を使います。相手も自分の母語を使います。でも聞いたらお互いに分かります。つまり、自分が一番使いやすい言語を話しながらお互いが理解できる社会が理想であるということが、CEFR の



複言語主義の考え方なのです。ですから、(高度に専門的な通訳などを目指す人は別として)、多くの人々が母語レベルまでもは目指さな

くていい、とりあえずはいろいろな言語が交差する社会の中で自分が不自由なく生活ができるレベルを目指そうという方向に向かいつつあります。ことばの習得についての考え方はそういう方向に変わってきています。どんどん外に出て、場数を踏んで、ことばの習得を目指していただきたいと思います。

< 終 >

お知らせ

JIC インフォメーションの電子化について

日頃は JIC インフォメーションをご愛読いただきありがとうございます。JIC では電子版インフォメーションの読者を募集しています。具体的にはメールアドレスをご連絡いただければ、PDF 形式でダウンロードできるように、毎号発行時に案内メールをお送りいたします。ご希望の方は E-mail アドレス「jictokyo@jic-web.co.jp」にご連絡ください。件名を「インフォメーション」とし、①お名前、②ご住所、③お電話番号、④メールアドレス に電子版インフォメーション希望の旨を書き添えてお送りください。よろしくお願いいたします！

また、今号より JIC インフォメーション誌は年 4 回(4、7、10、1 月)の発行とさせていただきます。引き続きロシアに関する様々な情報を発信していきたいと思いますので、ご愛読よろしくお願いいたします。



過去へのまなざし、未来へのアプローチ

～現代ロシアの人気作家たち【第2回】



沼野 恭子 (東京外国語大学教授)

前回に引き続き、東京外国語大学教授・沼田恭子先生による講演をご紹介します。今回はその第 2 回目をご覧ください。

(3)リアリズムの復権 リュドミラ・ウリツカヤ

次に再び過去に熱いまなざしを向けている作家を取りあげたいと思います。

19 世紀ロシア文学の非常に強い潮流はリアリズムだと一般的に言えると思います。1991 年にソ連邦が崩壊する前後から、いろいろな文学的潮流がまるで山が噴火するように噴出してきました。その中で目立った潮流だったのはリアリズムではなく、ポストモダニズムという潮流でした。1990 年代にはポストモダンとかポストモダニズムという言葉がほとんど流行のように、盛んに使われたものです。しかし、そういう中でリアリズムが全く力を失ってしまったのかというとそうではなく、やはりリアリズムの手法の実力作家たちが再び台頭してきます。その中で、現在最も実力があり、また人気も高いのがリュドミラ・ウリツカヤです。ウリツカヤは現代ロシアを代表する作家のひとりで、ノーベル文学賞の候補として名前があげられています。



作家ウリツカヤの名前を国際的に有名にしたのは、1992 年に出版された『ソーネチカ』という小説です。

本の大好きな女の子が長じて、ある片田舎で図書館の司書になり、そこで「運命の人」と出会い結婚します。ソ連が舞台になっている過去のお話で、夫のロベルトは反体制芸術家としてパリから帰ってきたという設定です。ロベルトは好きなのところに住むことができない流刑の身で、ソ連国内を転々と定められた場所に住まなければなりません。そのロベルトとずっと添い遂げるわけですが、そのヒロインがソーネチカです。「ソーネチカ」というのは、「ソフィア」が本来の名前で、愛称形が「ソーニャ」、さらに可愛らしいとか愛しいという気持ちが高じると「ソーネチカ」という愛称になります。「ソーネチカ」と



いうタイトルから、語り手であるウリツカヤ自身のヒロインに対する愛情が感じられます。

ソーネチカはロベルトと結婚して一生幸福に過ごしたかというそうではなく、晩年にロベルトに若く美しい恋人が出来てしまうという、大きな試練が待っています。ソーネチカがその試練にどのように向き合ったのかということが感動的に描かれている小説です。ソーネチカの生き様、「女の一生」が淡々とした文体で書かれているわけですが、それほど長い小説ではなく、ロシアの分類では повесть (中編小説) になります。あくまでもソーネチカの生き方そのものに焦点が当てられていますが、遠景にソ連時代の矛盾や問題がうつすらと見え隠れしている、そういったまさに正統的なリアリズムの手法で書かれています。

さらに、ウリツカヤは、これはまだ日本語訳されていませんが、『クコツキー家の人びと』(2000 年)でロシア・ブッカー賞を受賞しました。こちらは роман (長編小説) です。ロシア・ブッカー賞は、現在、ロシアで最も権威のある文学賞ですが、ウリツカヤは女性作家として初めてこの賞を受賞しました。クコツキーは、ユダヤ人の男性ですが、腕の立つ優れた産婦人科医です。クコツキーを主人公にした、親・子・孫の三代にわたる家族の壮大な年代記です。「ユダヤ」というテーマはウリツカヤにとっては重要なテーマのひとつで、クコツキー自身がユダヤ人ですし、ソーネチカもユダヤ人です。そこに、堕胎禁止をめぐる問題、ユダヤ人差別の問題、非公式芸術の問題、公式に認められていないアンダーグラウンドの芸術家達がどのように活動していたか、あるいはその活動を封じ込められていたかといった様子などが盛り込まれていて、『ソーネチカ』よりもさらに一歩進んだ形で、ソ連社会の抱えていた問題をくっきりと浮き彫りにしています。

『通訳ダニエル・シュタイン』

ウリツカヤは最近非常に素晴らしい作品を書きました。2006 年に出版された『通訳ダニエル・シュタイン』です。日本語訳は 2009 年夏に出版されたばかりです。上・下二巻の長編ですが、大変面白く、私の「一押し」なのですが、実在の人物をモデルにした半ばドキュメンタリーのような小説です。



主人公のダニエル・シュタインは 1922 年にポーランドで生まれたユダヤ人です。ここでもユダヤの問題が大きく取り上げられています。第二次世界大戦の勃発とともにドイツ軍がポーランドに侵入し、ダニエルはドイツ軍から逃れてリトアニア(ヴィリニウス)、次にベラルーシへとたどり着きます。まだ十代の少年だったのですが、両親とは途中で別れ、二度と会うことができませんでした。

ドイツ語が堪能だったダニエルは、ベラルーシで生き延びるためにやむなくユダヤ人であることを隠してゲシュタポ



でドイツ語・ポーランド語の通訳をするはめになります。ゲシュタポで働くことがどう

いう意味をもっているか、ダニエルはもちろん知っていますが、彼はその立場を利用してユダヤ人を助けられるのではないかと考えるのです。そして実際にあるユダヤ人ゲットーの人々約 300 人を「殲滅」から救い出すことに成功します。ただ、ゲットーではダニエルを信用する人もいれば、「ゲシュタポの手先など信用できるか」と言う人もいました。彼を信頼して脱走した 300 人だけが命を落とさずにすんだわけです。このとき命を救われたユダヤ人たちの何人かが作品の中で重要な登場人物になっていて、物語を立体的に支えています。

ユダヤ人を救ったために正体が露呈してしまったダニエルは再び命からがら逃走します。彼は何度も、死んでもおかしくない場面に遭遇しながら、その度に奇跡的に命が助かります。例えば、彼は靴職人の技術を身に付けていたのですが、ナチスがユダヤ人を選別する時に「靴の修繕ができる奴はこっち」と言う。それで振り分けられて殺されずにすんだというように、本当に紙一重という場面に何度も遭遇するので、そのためダニエルは「自分の命は自分のものではない。神から贈られたものだ。」と考えるようになります。そして、逃亡生活の途中でカトリックの修道院に匿ってもらい、信仰に目覚めてカトリックの洗礼を受けるのです。私たち日本人には理解しにくいのですが、ユダヤ人でありながらカトリック信者になるということは、自らのアイデンティティを分裂させるほど重大なことなのです。つまりユダヤ人というのは人種ではなく、ユダヤ教の戒律に従って生きている人がユダヤ人なわけですから、ダニエルがここでカトリックに帰依したということは非常に複雑な問題を提示しています。

しかも、ダニエルは戦後、祖国ポーランドに帰ってカトリック神父になります。それだけではなく、1959 年にはイスラエルに渡ってカトリック教会を開きます。ユダヤ人でありながら

カトリックの神父であり、しかもイスラエルで教会運営をするという政治的にも社会的にも民族的にも複雑で込み入った状況にみずから身を投じるのです。

最初に紹介したアクーニンは「悪人」をもじったペンネームでした。しかし、ダニエル・シュタインは「悪人」の対極、「究極の善人」としか言いようのない人で、こんな人が実際にいたのか、それを知っただけで生きていく希望が湧くというくらい、本当にいい人なのです。このような「数奇な運命」というか「波乱万丈の人生」が描かれているわけですが、一直線の叙述ではなく、形式的にはダニエル自身の語った言葉や、周囲の人の手紙や日記、会話、報告書などの断片から組み立てられています。ダニエルや彼を取り巻く人々の人間模様、人生観、ドラマなどを取りこみながら、それらの断片が緻密なモザイク模様のように積みあげられ物語が語られていきます。さらに、作者自身の手紙が 5 つの章の終わりに置かれ、作者も登場人物のひとりになっているので、メタ・フィクション的な小説ということが出来ます。いちばん最後の作者の手紙を読んでみましょう。

●引用;『通訳ダニエル・シュタイン』(2006 年)

「親愛なるリャーリャ！ 神の助けを借りつつ、この物語をもうすぐ書き終えようとしています。この物語が始まったのは、ダニエル・ルフェイセンが私の家を訪れた 1992 年 8 月のことでした。貴女にこの話はしたかしら？ 彼はミンスクへ行く途中でモスクワに立ち寄ったのです。椅子に座ると、サンダル履きの足が床によく届くか届かないかわがらうでした。とても愛想がよく、とても普通の人でした。でも、その時私は何かが起きているのを感じました——屋根が分解してしまったような、あるいは天井下に火の玉が浮いているような感じです。それから私は悟りました——この人は神のいるところで生きているのだ、そしてその神の存在があまりにも強力なので、他の人にもそれが感じられるのだ、と。(中略)

ただ、18 歳のダニエルが森の中に隠れていた時、夜のチョールナヤ・プーシチャで射殺された 500 人のお年寄りや子供たちをどう考えたらいいのかわかりません……。他にも、何百万人ものそういう人たちがいます……。

私はイスラエルへ行くと、頭がくらぐらし、驚き、恐怖し、喜び、怒り、魅了されます。そしていつも甘酸っぱいにおいで鼻がひりひりします——それはユダヤ人独特の生活のにおいです。ここで暮らすのは大変です。スープは濃すぎるし、空気は濃密すぎるし、熱気がむんむんして、熱情と叫び声があふれすぎています。でも、ここから目を背けることも不可能です。ユダヤ人の村にすぎないこの小さな手作りの地方国家は、今もなお世界のモデルであり続けています。

主は何を望んでいるのでしょうか？ 従順さでしょうか？ それとも協力？ あるいはいくつもの民族が自分で自分を滅ぼすことでしょうか？ 私は何らかの価値判断をすることを断念しました。そんなことは私の手には負えません。ダニエルには何か重要なことを教えられたように心では感じているのですが、私の知ったその「大事なこと」をいざ定義し

ようとすると、要するに、その人が何を信じているのかというのは全く何の意味もなく、重要なのはその人個人の行動なのだとしか言いようがありません。やれやれ、立派な箴言だこと。でも、ダニエルはそういうことを私の心に直接吹き込んでくれたのです。」

『ダニエル・シュタイン』をずっと書いてきたウリツカヤの結論がここにあると思います。最後の方で「その人が何を信じているかということは意味がない」とまで言っています。ユダヤ教だろうとカトリックだろうと、仏教だろうとイスラム教だろうと何でもよい、重要なのはその人がどのように行動するかだということです。ダニエル・シュタインの行動がどれほど立派だったかということを逆に言っているのだと思います。

こうして、「物語を書く作者が、モデルとなった人物に出会ったときのこと」が物語の中に挿入され、事実(ノンフィクション)と虚構(フィクション)の境界線上に位置するような小説をウリツカヤは書き上げました。



ロシアでは 1990 年代に遊び感覚を存分に取り入れたポストモダンの潮流が流行しましたが、その後ウリツカヤのような力強いリアリズム作家が活躍するようになりました。タイトルを「リアリズムの復権」とした所以です。ウリツカヤが過去に向けるまなざし、過去と言ってもそれは現在に直結している近過去ですが、そのまなざしには、歴史を振り返り、その意味を問い直そうという真摯な輝きがあります。ウリツカヤの場合、その歴史というのは、はるか遠くの過去ではなく、作者自身が生きてきたソ連時代なのです。ソ連とは一体何だったのかということを今一度問い直さなければいけない時期だと思うのです。ウリツカヤが描いているさまざまな社会問題は今もなお解決されずに残っており、現在の私たち自身の問題でもあるからです。

異なる宗教や異なる考え方を現代世界で何とか共存させようとした、本当の意味での理想主義者であったダニエル・シュタインを少しでも多くの日本人に知ってもらいたいと思います。

【ウリツカヤの日本語訳作品】

『ソーネチカ』沼野恭子訳、新潮社、2002 年刊

『それぞれの少女時代』沼野恭子訳、群像社、2006 年刊

『通訳ダニエル・シュタイン』前田和泉訳、新潮社、2009 年刊

(4)メタファーの横溢 オリガ・スラヴニコワ

次に紹介するのはオリガ・スラヴニコワです。ウリツカヤが「近過去」を題材にしているのに対して、オリガ・スラヴニコワ

は「近未来」を扱っています。スラヴニコワの作品はまだまとまった翻訳が出されていません。わずかに短編が雑誌で紹介されている程度ですが、彼女の代表作は、やはりロシア・ブッカー賞を受賞した長編小説『2017』だと思います。

スラヴニコワは最初、文芸評論家として活躍していました。1996 年に『犬の大きさになったトンボ』という小説を書き、これがいきなりロシア・ブッカー賞にノミネートされて、作家として注目を浴びるようになりました。これは母と娘の愛憎関係をテーマにした作品でした。



その後、彼女は『不死の人』(Бессмертный)という長編を発表します。どういう作品かということ、ある元諜報部員が病気になる寝たきりになります。家族や看護している人たちは病人に精神的ショックを与えないようにと、ソ連が崩壊したことを知らせずにあたかもソ連時代(ブレジネフ体制)が続いているふりをし続けるという物語です。この設定がドイツでヒットした映画『グッバイ・レーニン』にそっくりだということで大変話題になりました。映画のほうは、東ドイツが舞台で、主人公の病人は女性です。お母さんに東西ドイツが統一したことを知らせないでおこうと周囲がいろいろ画策する、ちょっとコミカルな映画です。スラヴニコワの小説のほうが映画のシナリオより少し先に書かれているようですが、偶然同じような発想が生まれたのか、それとももしかしたら映画の関係者がちょっとアイディアを貰ってしまったのか、今のところ真相はわかりません。

スラヴニコワも 2009 年 10 月に来日し、東京外国語大学で講演をしてくれました。さすがに評論家だけあって、現代ロシアの文学状況についてとても有益で面白い話をしてくれました。

彼女の長編小説『2017』のタイトルがいったい何を意味しているかわかりになりますか？ そう、1917 年のロシア革命から 100 周年の年が 2017 年です。今年は 2009 年なので、今から 8 年後。すごく近い未来です。しかし、革命 100 周年をどのように祝うのか、あるいは祝わないのか、ソ連邦が崩壊してしまった今、ロシア革命によって誕生したソ連という国をどう考えたらいいのか、ロシアではまだ議論が起こっていません。そういう中でスラヴニコワはいち早く 100 周年という近未来を設定して物語を作り上げたわけです。

物語は、パーヴェル・バジョフという作家の創作民話『石の花』のモチーフを取りこみ、ウラル山脈とおぼしき地方で宝石の採掘をする「宝探し」をミステリー仕立てで展開させたものです。主人公は腕の立つ宝石職人のクリイロフ。ここ



に謎めいた美女ターニャが登場し、クリイロフは彼女に翻弄されつつ、ラヴロマンスを絡めながら物語は進行します。

スラヴニコワの特徴は、比喩(メタファー)に彩られた密度の高い難解な文体にあります。トルスタヤとはまた少し違った方法で比喩がたくさん使われ、ロシアの批評界ではしばしば「ナボコフのような文体」だと賞賛されています。ウラジミール・ナボコフは 1899 年生まれ。ロシア革命のあとヨーロッパに亡命し、ベルリン、パリ、ついでアメリカで活躍しました。本当に言葉の使い方が上手で、「言葉の魔術師」と言われた作家です。

『2017』は日本語訳がありませんので、スラヴニコワの来日に合わせて先日文芸誌に訳した短編「超特急『ロシアの弾丸』」を読んで、その文体を少しでも味わっていただきましょう。これは、『2017』に比べるとずっと平易な文体ですが、それでも比喩がたくさん出てきます。

●引用;「超特急『ロシアの弾丸』」(2008 年)

「目の前に現れたのはジェットエンジン搭載の超特急「ロシア号」だった。30 分後にはモスクワからイルクーツクに向けて史上初の運転を開始することになっている。この超特急、ニュースでは必ず「ロシアの弾丸」と呼ばれている。ゴルベフは、以前一度「弾丸」列車を目にする機会があった。それは日本の山梨県でのこと。超伝導磁石によるリニアモーターカーだったが、針のような姿をしていて、耳を思わせる窓がいくつもあった。リニアモーターカーは音も立てず、切り裂かれた空間のかすかな振動と余韻だけを残して、あっというまに視界から消えた。日本と違ってロシアの超特急は、ガタがきている地元のシベリア横断鉄道で記録を打ちたてる予定だ。異様なほど短く流線型で背中中の盛り上がった車体は、列車というより潜水艦、いや今にも発射しようとしている弾道ロケットのように見える。それというのも、頭の部分にある金属の角に、まだ冷たい二本のジェットエンジンが黒ずんだ葉巻のように載っているからだ。

これはなかなかの壮観で、陸生オウムガイが体の大部分を地中に残して頭をもたげている姿のように思えた。本来ならロシアという厚い地層の中にいて氷河に削りとられた岩の破片を蹴散らしながら動きまわっているはずのオウムガイが、上に這いのぼってきたかのように。列車はまるで焦げた岩のかたまりにおおわれているみたいだ。ハイテクらしく光り輝いているところや装いを凝らしたところはどこにもない。「ロシア号」がまとっているのは黒っぽい粒状の重合体で、これによって轟進する車体のまわりに薄くて真空中に近いシールドを張りめぐらすことができるという。」

「針のようなリニアモーターカー」「耳を思わせる窓」「潜水艦」「弾道ロケット」「陸生オウムガイ」など比喩が満載です。中でも、時速 700 キロで爆走する列車が「ロシア号」あるいは「ロシアの弾丸」と名づけられていて、ロシアの運命を象徴しているのがこの小説の最大のメタファーになっています。このようにメタファーにつぐメタファーなので、これは一体何

を表しているのかということを一いち立ち止まって考えないと先に進めないような文体になっています。

『2017』に話を戻しますと、小説の中ではロシア革命 100 周年の式典が準備されるのですが、これが次第に暴動に発展していきます。それと平行して、民話の「石の女王」のようだった恋人ターニャを主人公クリイロフは失ってしまう。一方、クリイロフの妻はすごく現代的なビジネスウーマンです。お金持ち専門の葬儀屋さん、金儲けに走るビジネスウーマンで、いわゆる新富裕層、「新ロシア人」(Новые русские)と呼ばれている人々の生態もしっかり物語の中に取り込んでいます。ここでは、「石の花」というウラルの伝説と現代ロシア社会、2 つの価値観が拮抗するような形で描かれています。

作者のスラヴニコワ自身が分析しているとおり、この小説にはさまざまなジャンルの要素が取り入れられ融合しています。スラヴニコワは、ロシア文学の未来は「ジャンルの混交」にあるだろうと指摘しています。

【スラヴニコワの日本語訳作品】

「モンプレジールの終わり」岩本和久訳(『神奈川大学評論』2009 年 62 号所収)

「超特急『ロシアの弾丸』」沼野恭子訳(『新潮』2009 年 11 月号所収)

< 次号へ続く >

Японский Язык

Краткосрочные курсы в центре Токио

Преподавание на русском языке

13 апреля начинается весенний семестр!

★ロシア語で教える日本語講座 2010 年度前期★

<入門クラス> 12:30 - 14:00

<中級クラス> 14:30 - 16:00

<初級クラス> 16:30 - 18:00



日程: 4 月 13 日(火) ~ 7 月 9 日(金)までの火・金曜日

全 22 回(祝日、GW 期間はお休みとなります)

授業料: 各クラス 66,000 円

会場: 国際親善交流センター(JIC)東京オフィス 会議室

За дополнительной информацией обращаться –

TEL: 03-3355-7297 FAX: 03-3355-7289

E-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

HP: <http://www.jic-web.co.jp/study/lang/japan.html>

JICのホームページを
チェックしよう!

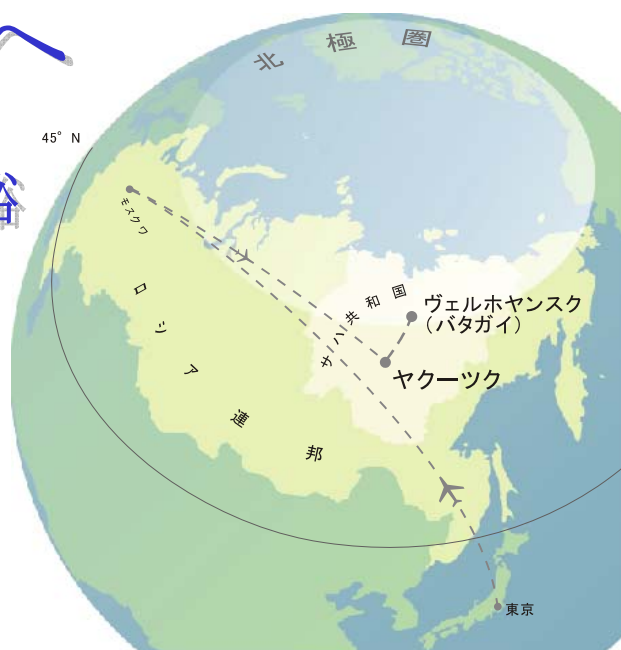
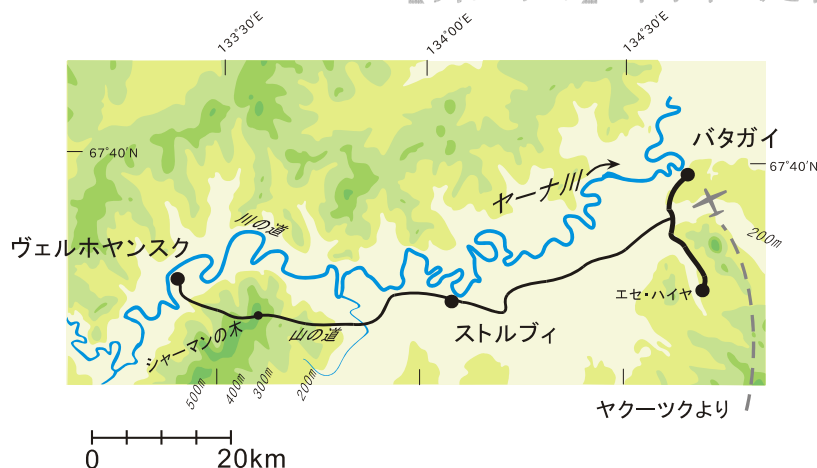
<http://www.jic-web.co.jp>



エクメネの最果てへ

—サハ共和国 冬の旅—

【第5回】岡本 健裕



ストルビを出発する前に、今更ですが、今回のヴェルホヤンスク旅行のメンバー紹介をしておきましょう。

サルダナさん:現地旅行会社のスタッフ。ヤクート人女性。(優秀)

アナトリーさん:現地ドライバー。ヤクート人男性。(頼もしい)

オオノさん:新聞記者。日本人男性。(敏腕)

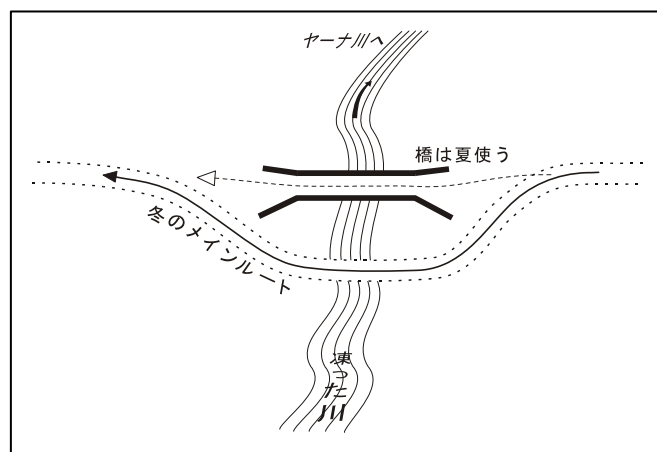
オカモト:筆者。日本人男性。(若造)

おやと思われた読者の方はエライ！いつも熱心に読んでくださってありがとうございます。お一人、この連載では初登場の方、オオノさんがいます。実はオオノさんと私は、モスクワで合流しておりました。もちろん、ヤクーツクからずっと一緒だったのですが、すみません、ご紹介がずいぶん遅れてしまいました。さらに鋭いみなさまはお気づきでしょう。連載の第2回で筆者のカメラが壊れたはずなのに、その後の連載にもちゃんと写真が現れてくるのはどうしてなのか。そうです、オオノ記者のお許しを得て、貴重な写真の数々を分けていただいたのです！というわけで、この場ではっきりと申し上げておきます。本連載に登場する写真は一部を除き、すべてオオノ記者のご厚意によってこの紙面にあります。本当にありがとうございます。

さあ、出発しましょう。ストルビの先は、またそれまでのような車 1 台分の道幅の道路が続いています。道は時々、小さな川を渡ります。これらの川はヤーナ川の支流なので、進行方向右へと流下していきます。面白いのは、その渡り方です。川にはちゃんと橋が架かっているのですが、全然これを使いません。何と、わざわざ迂回して橋を避け、凍った川の上を直に渡るのです。アナトリーさんのウアズ(ロシア製四輪駆動車)だけが気まぐれにそんな運転をしている

のではないことは、道路の状態を一目見ればわかります。橋の方にはまっさらな雪が被っていて、先行車両の痕跡が全然ないのです。川に張った氷の上には、幾条もの轍があるのに。それどころか、通せんぼをしてあって、渡れないようにしてある橋まである始末です。なぜだと思いますか？

その理由を一言で言えば、「橋よりも氷の方が信頼性が高いから」です。川に架かっている橋は、決してちやちやも



のには見えません。それでも性能には限度があります。ウアズが 1 台通ったところで、もちろんどうってことはないでしょうが、トラックが 2 台同時だと・・・どうでしょう。まあ、そういう微妙な強さなんです。その点、凍結した川は丈夫です。氷はメンテナンスいらずで信頼性抜群の橋みたいなもので、しかもタダで毎年架け変わってくれるのですから、こちらが冬のメインルートになるのも当然の成り行きと言えるでしょう。

いつしか、連続上り勾配になりました。ここから、標高 500m 強の稜線へと続く峠越えの道になります。前回から

載せている等高段彩入りの周辺地図は、1987 年測量のソ連発行地形図を元に描き起こしたのですが、大雑把に水平距離 15km に対し、標高差 400m 程度と読み取れます。単純な計算では平均勾配は約 2.6%、つまり 100m 進むごとに 2.6m 高度が上がることになります。これは、道路勾配としては大した数値ではありません。実際、車窓から眺めていても、周囲の山はゆるゆると丸っこい形をしていて、穏やかな地形です。

山の形が険しくないのには、寒冷地に特有の理由があります。例えば、ソリフラクション(solifluction)という作用です。聞き慣れない言葉ですね。前回の連載で紹介した、活動層(active layer)のことを覚えていらっしゃるでしょうか。永久凍土地帯の地表面付近にある、夏の間に融ける層のことです。もし、この活動層が傾斜地にあって、融けたり凍ったりを何年も繰り返すとどうなるでしょう。活動層は、自らの動きでぐちゃぐちゃにかき混ぜられながら、重力によって低い方へとゆっくりゆっくり移動していくのです。これがソリフラクションです。厳密に言えばジェリフラクション(gelifluction)とか、フロストクリープ(frost creep)とか、メカニズム上は区別できる複数の現象が入り混じっているのですが、細かく説明しているとマニアックな



地形の世界の深みにはまる一方ですので、やめておきます。要するに、山の表面がものすごくねばっこい液体でできていると考えてください。液体はどんどん平らになろうとするので、山の形は丸く、傾斜は緩くなっていくわけです。

こんなふうには、融けたり凍ったりを繰り返しながら形成される地形を総称して、周氷河地形といいます。この「融けたり凍ったり」という部分が重要で、南極や高山のように一年中凍ったままのところでは、全く違う地形(例えば氷河地形など)が発達することになります。

1 万年ほど前まで、つまり地球が最終氷期にあった頃までは、日本列島にも、さまざまな種類の周氷河地形が形成されたと考えられています。しかし、現在はほぼ姿を消してしまいました。山岳地帯など、わずかに残っている箇所も、その多くはすでに発達をやめていて、化石周氷河地形などと呼ばれています。周氷河地形がその姿を保っているためには、融けたり凍ったりする周氷河作用が働くことだけでなく、より強い別の侵食作用を受けずにいることも条件となります。

サハ共和国を含む、東北シベリア地域の降水量は、年

間わずか 200mm 前後しかありません。例えば東京だと、年間 1,500mm 弱の降水量がありますから、およそ 7-8 倍の開きがあるわけです。日本人はつい、「寒いところ＝豪雪地帯」と考えがちですが、実は世界中でも日本の北国ほど大量の雪が降るところは稀で、タイガに覆われた永久凍土地帯のほとんどは、雪もそれほど降りません。降水量から見れば、砂漠並みと言っても遜色のない「乾燥地帯」でもあるのです。

私が今登りつつある斜面が、緩やかな姿のままであることには、この降水量の少なさが大いに関係しています。降水というものは、地表面にとっては鋭い刃物にも等しい存在です。仮に、ここに大量の雨が降ったり、大量の雪が降って夏は融けるものとしましょう。それは川となります。斜面を流れる水の侵食作用はたいへん強いので、断面が V 字型の谷がどんどん作られます。すると、山はたちまち彫刻刀で削りだしたような険しい姿になっていきます。実はこれが、日本の山地の典型的な姿です。削られ続けるといずれなくなってしまうのですが、日本列島は、新期造山帯といって、バンバン隆起するところにあるため、いつも尖っているわけです。

ちなみに、大量の降雪があつて、夏にも融けずに蓄積し続ける場合、これは氷河になります。斜面にできた氷河は、断面が U 字型の谷を作り、深々と地表面をえぐります。夏に地面が融けないので、こういうところには、はじめから周氷河地形はできません。

今回もまた、地形の話を長々と続けてしまいました。でも、単に自分好みの話題を読者に押し付けているだけではありませんよ(まあ、9 割方そうなんですが)。人が、故郷とは違う、見慣れない地形を旅先で目にするという経験は、それ自体理屈抜きにエキゾチックだからです。

なかなか気づきににくいことですが、これは裏を返すと、我々にとってありふれた日本の山々の姿カタチにも、大変なエキゾチシズムを感じる外国人が相当数いるってことです。何も、富士山とか、突出した存在でなくていいんです。どこからどう見ても当たり前の、普通の谷、ただの斜面、見慣れた植生が、ある人々の目を通した途端に「異なもの」



に化けうる。それこそ、海岸にザッパーンと波が打ち寄せているだけでも、誰かにとっては「何じゃこれ、スグー！」と見える。

でも、こういうギャップって空気みたいなもので、文章にされる機会は多くないですね。だから、この連載では、あえ

でそのあたりをちょっと余計なくらいに伝えてみようと思います。

アナトリーさんのウアズは峠のてっぺんで停まりました。進行方向右側に、ちょっとした広場があって、立派な丸木造りのあずまやがあります。サルダナさんから車を降りるよう促されました。

「ここが、シャーマンの木です」

えっ、どれ？一瞬わかりませんでした。予想していたよりはるかにショボ…いや、スリムな木です。林業関係者が見たら、迷わず間伐材にされそうな、全身に弱々しさをみながらせた姿で立っています。

一応、シャーマンの木の名誉のためにお断りしておきますが、この木が周囲のほかの木々と比べて、顕著に小ぶりであるわけではないのです。見たところ、このあたりの気候条件では、どの木もみんな間伐材レベルまでが成長の限界、ということのようです。

つまりは、全く平均的なサイズの木でしかないのですが、なぜだかこの木が特別扱いされていることは間違いありません。何やら、色とりどりの布切れが大量にくくりつけてあって、異様な姿をしているからです。サルダナさんによると、ここを通過する人は皆それぞれ、自分で用意した布切れや供え物を置いていき、この木に敬意を表すのだそうです。



＜シャーマンの木＞

なるほど、それは大いに結構なことなんですが、ちょっとこの木の周り、汚くないですか？ゴミ落ちてるんですけど…。特に目立つのはタバコの吸殻です。吸殻どころか空き箱まで落ちてます。本当に聖なる木として扱われているのでしょうか。

誤解を恐れず言いますが、ポイ捨てはロシアの文化です。特に大都市ではそうですが、割と市民は道端に小さなゴミを捨てています。1960-70 年代頃に日本人が書いたソ連紀行文には、たいいていこんなことが書いてあったものですーモスクワの町並みは美しく清潔な印象である。特に、どこを歩いても吸殻ひとつ落ちていないのには感心したーという具合に。この手の文章が、ちょっと左側から見た、甘めの採点になっていたとしても、ほぼ、現実とその通りだったことでしょう。じゃあ今のロシア連邦の国民にモラルが低下してしまったのかというと、そうでもありません。実は昔も今も、ポイ捨てしまくりです。つまり、清掃が、行き届いているのですね。

日本人は、この 30 年ほどで急速に、「ポイ捨てしない国民」になりました。日本の町がきれいなのは、道端のゴミを迅速に処理するからというよりも、あまり発生させないからです。大いに誇るべき、すばらしいマナーです。少し前の

日本人は、もっと町を汚しまくっていました。1980 年代、私はまだ子どもでしたが、その頃でさえ、思い出すと確かに色々汚なかった…(国鉄の駅には、痰壺なるものまであったのです)。そんな時代の日本人が、ソ連を旅行して目撃したものは何か。例えば…バスを待っている乗客達が吸殻を道に捨てる→バスが乗客を運び去る→清掃員がやってきて吸殻を掃き集め、チリトリで持ち去る→美しい町に静寂が訪れる…きつと、初めてデ○ズニーランドに来た人みたいに、感動したんじゃないかと思うのです。今でもロシア連邦の都市には、その文化が健在なのですが、かえってそのために人々は気軽にポイ捨てをします。残念ながら、めったに清掃員が来なさそうなところにもです。

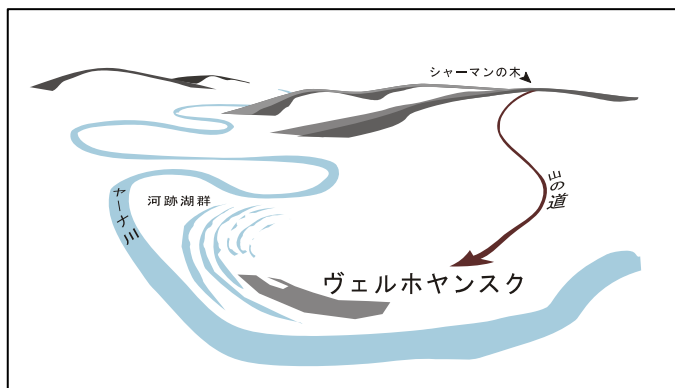


＜左から筆者 サルダナさん
アナトリーさん＞

少々皮肉なことですが、このシャーマンの木、多くの人に立ち寄られ、親しまれている様子が、この吸殻の数でよくわかります。あずまやも含めて、ドライバーのちょっとした休憩所みたいな働きもしているようです。もしこれが日本なら、峠の神社に寄って、ついでに交通安全祈願を、とご神木に手を合わせていくような感覚でしょうか。



ところで、シャーマン信仰というところ、つい、ソ連初期の有名なプロパガンダポスター(※)の文句「地元の労働者ソビエトを選択せよ。シャーマンやクラーク(富農)を野放しにするな。」を思い出してしまいます。革命の熱狂時のことですから、こういう過激な文句が出現してしまうことはまああったのですが、しかしシャーマンって、クラークと並ぶ「絶滅すべき階級敵」扱いだったんですね…。わずか 80 年前の話ですが、このサハ共和国ではどの程度、シャーマン文化が生き延びることができたのでしょうか。完全に絶滅はしていないことを、今こうして直に確認することができましたが、おそらくかなりのダメージを受けているはずだと思います。(ちなみに



クラークの方は、ソ連政府により事実上、絶滅させられました。)

色々複雑な気持ちでシャーマンの木を後にすると、ここからはずっとヴェルホヤンスクへの下り坂です。ちょっと進むと前方の視界が大きく開けました。アナトリーさんが右前方を指差します。

「ほら、あれがヴェルホヤンスクだよ。」

見えた！モクモクと黒い煙、白い煙を上げる煙突たち、その根元にべったりと広がる灰色の市街地。立派な町だ…。バタガイでも、ストルビイでもつぶやいた言葉が、また出てしまいました。

いよいよ次回は、憧れの寒極、ヴェルホヤンスクへ、突入です！

※デザイン：G. ハローシェフスキー (Георгий Хорошевский)、スローガンの原文は、ロシア語：Выберем в туземный совет трудящихся. Не пускай шамана и кулака. (1931)

<次号へ続く>



JIC夏の短期ロシア語研修旅行

ロシア人と仲良くなろう！ サンクトペテルブルグロシア語研修 & ホームステイ

期間：2010年9月3日(金)～17日(金) 全15日間
料金：成田発 ¥248,000-

(サンクトペテルブルグでのホームステイ 1 名 1 室利用の場合の 1 名様費用)

*トランスエアロ航空利用

*燃油サーチャージ目安 往復 12,000 円

(2010 年 4 月 1 日現在)

*上記のほかに、空港税ー成田 2,040 円、成田空港旅客保安サービス料 500 円が別途必要となります。またビザ費用として 10,250 円(実費・代行料込)が別途必要となります。

締切：2010年7月28日(水)

◎詳しい旅行条件等を記載した書面をお渡しいたしますので、事前にご確認のうえ、お申込み下さい。

旅行企画実施：ジェーアイシー旅行センター(株)
研修協力：JIC 国際親善交流センター

2010 年 J I C 夏の短期ロシア語グループ研修は、テルジャーヴィン・インスティテュートで学ぶ 2 週間のロシア語レッスン。レッスン後には、1 週間に 1 回、ロシア文化に触れる課外授業を用意し、さらに週末には、見どころいっぱいサンクトペテルブルグ市内を観光するなど、サンクトペテルブルグの魅力がたくさん詰まっています。滞在はロシア人家庭でのホームステイです。先生だけでなく色んな人が話すロシア語を聞いて、ロシア語を聞く力を養いましょう！

1 週間授業を受けた後の週末には、日本語を勉強しているロシア人と一緒に時間を過ごす交流プログラムをご用意しました！レッスンで学んだロシア語をさっそく使って、ロシア人の友達を作りましょう！



留学・研修各種パンフレットは JIC へご請求ください。
留学・旅行相談お気軽に！



JIC フェアー大阪

在阪のロシア(旧ソ連)人の方、ロシアファンの日本人、ロシア語を勉強中の方などがたくさん集まる恒例の JIC フェアーを今年も 6 月に開催！情報交換の場として、日頃のロシア語学習の腕だめしの場として、友達作りの場としてぜひご利用ください。

持ち寄り式のパーティーですので、お 1 人 1 品(食べ物・飲み物など)をお持ちください。調理室もありますので、温めたり盛りつけたりできます。ぜひお気軽にご参加ください！

日時：6 月 5 日(土)13:00～17:00

会場：ドーンセンター(大阪・天満橋)

参加費：お 1 人様 1,000 円

(当日受付にてお支払いください)

申込締切：6 月 4 日(金)

申込方法：参加者のお名前・電話番号を TEL・FAX・Eメールなどで JIC までお知らせください。

TEL:06-6944-2315 FAX:06-6944-2318

E-mail : jicosaka@jic-web.co.jp



JICモスクワ通信 vol.20

モスクワ州の小さな町
コロムナ

先週、友達と一緒にコロムナという町に行ってきました。コロムナというのは、モスクワ州にあり、モスクワから 100 キロ程度離れたところにあります。人口は 15 万人ぐらいで小規模な町ですが、モスクワと同じように 12 世紀ごろに創立されたそうです。コロムナに行く観光客はそんなに多くないですが、町の名前はかなり有名です。

まず、コロムナという言葉の由来について話をします。誰もはっきりと分からないのですが、コロムナはモスクワ川に支流のオカ川が合流する地点にあります。大昔、現在モスクワ州と呼ばれる地方には、フィン・ウゴル語派の部族が住んでいたため、多くの名前の由来はフィン語です。オカ川もそうです。現在のフィンランド語では joki(ヨキ)といいますが、「オカ」は「川」という意味です。コロムナの辺りでは、オカ川の形はジグザグになるため、人々は「オカ・ロムナ」(＝オカ川は折られているという意味)と呼び、町の名前が「コロムナ」になったという伝説があります。ちなみにモスクワには「カローメンスコエ」という有名な公園がありますが、昔は「コロムナへの道にある」村の名前でした。

コロムナには、モスクワと同じようにクレムリンがあります。モスクワクレムリンの 30 年後に建設され、規模は小さいですが、とてもきれいなお城です。建設者がイタリア人だったので、イタリア建築に少し似ています。コロムナはモスクワの南東方向に位置しているため、タタール人などの侵略者がモスクワへ入る際には、その足掛かりとしていつもこの町に寄っていたそうです。



今回皆さんにご紹介したいのは、コロムナのパスチラです。パスチラとは、果物と砂糖で作られた伝統的なお菓子です。19 世紀はじめの話になりますが、ちょうど西ヨーロッパでゼフィールというお菓子が現れたころ、ロシアでも独特なお菓子をつくろう、ということでパスチラが誕生しました。生産地はコロムナを含めて 3 箇所ありました。現在、コロムナにはパスチラ博物館があります。ロシアの伝統的な農民の家の中です。そこでパスチラの歴史について説明を聞き、紅茶を飲みながら、7 種類のパスチラを味わう体験もできます。100 年前の時代の服装をしたロシアのおばあちゃんが 2、3 人いて、とても親切に説明をしてくれます。もちろん、パスチラは普通に売られていますので、持ち帰りもできます。ぜひ体験してみてください！

モスクワ トカチェンコ・ドミトリー

マシュマロのような
食感が特徴です!!!

2010年4月開講

前期 全17回 途中入講可能!

JIC東京ロシア語講座

受講料: 全 17 回 51,000 円

定員: 1 クラス 4~8 名程度

会場: 国際親善交流センター 東京オフィス
(東京・四谷)

- <入門> 月曜 19:00-20:30 ゼロからのスタート! 1 年間かけてロシア語の基礎文法を勉強します。
- <初級> 火曜 19:00-20:30 ロシア語のやさしい読み物を読みながら、会話にも慣れていきます。
- <中級> 水曜 19:00-20:30 身近な出来事などを題材に、ロシア語の表現力を高めていきます。
- <文学講読> 木曜 19:00-20:30 小説を中心に授業をすすめます。学習歴 3 年程度以上のロシア語力の方対象。
- <時事会話> 金曜 19:00-20:30 新聞・ニュース・物語などを題材に総合的なロシア語力を高めることが目標です。
- <使える会話①> 土曜 10:45-12:15 ビデオを使って、より高いレベルのロシア語力を目指します。上級の方対象。
- <使える会話②> 土曜 12:30-14:00 ビデオを使って、よく使うロシア語を学びます。初級~中級の方対象。

詳細は JIC 東京オフィスまでお問い合わせください。複数講座同時受講割引もあります。ロシア語をはじめませんか?

2010年4月開講

前期 全15回 レッツ・トライ!

JIC大阪ロシア語講座

受講料: 全 15 回 35,000 円

定員: 1 クラス 5~10 名程度

会場: 国際親善交流センター 大阪オフィス
(大阪・天満橋)

- <入門> 火曜 19:00-20:30 ゼロからのスタート! アルファベットや挨拶をはじめ、ロシア語の基本を勉強します。
- <初級> 木曜 18:30-20:00 ロシア語の文法をひとつひとつ学びながら、会話も少しずつスタート。
- <中級> 金曜 19:00-20:30 会話のバリエーションを増やしましょう。総合的なロシア語力アップが目標です。
- <上級> 月曜 19:00-20:30 新聞を読んだりディスカッションをしたりします。会話力を磨きましょう。

詳細は JIC 大阪オフィスまでお問い合わせください。学生割引もあります。今年こそ頑張りましょう!

ロシア (旧ソ連圏) よりペンパル募集!

お友達をつくりましょう!

① Name ② Sex ③ Born(Age) ④ Address ⑤ E-mail ⑥ Occupation, Hobby ⑦ Language

①Maria Vorobiova ②Female ③ - ④Ukraine, Vinnitsa ⑤violoncellosword@gmail.com ⑥Anime & Manga, J-rock, classical music, cello, swords, art, design, books, fantasy, psychology, philosophy, dolphins etc.. ⑦English, Russian

①Nidulina Elena ②Female ③20years old ④Russia, Moscow ⑤talla88@list.ru ⑥Literature, Japanese culture, Dorama ⑦English, Russian

①Smirnov Iliya ②Male ③01 Apr. 1989 ④Russia, Bologda ⑤dagoth-100@mail.ru ⑥Foreign Languages, Reading, Travel ⑦Japanese

①Diyachenko Kira ②Female ③1991 ④Russia, Perm ⑤La_vie_et_mort@mail.ru ⑥Animals, Music, Anime ⑦Russian, English and Japanese

①Lyzina Alena ②Female ③1990 ④Russia, Perm ⑤l-alyona-s@hotmail.com ⑥Friends, Music, Anime, Manga, Literature, Sports ⑦Russian

①Klimenko Alexei ②Male ③1989 ④Russia, Moscow ⑤klimblin@mail.ru ⑥Japan, Japanese music & anime ⑦Russian

①Bruhanuv Anton ②Male ③15 Aug. 1988 ④Russia, Chelyabinsk ⑤reimy2@gmail.com ⑥Movies, Anime, Sports ⑦Russian

①Uskova Alexandra ②Female ③1992 ④Ukraine, Kiev ⑤USSandra@bigmir.net ⑥Drawing ⑦Russian, English

①Gradovska Tetyana ②Female ③1985 ④Ukraine, Kiev ⑤gradvska@mail.ru, gradovska@ukr.net ⑥music, reading, art, languages, travel ⑦Russian, English

①Orlov Evgeny ②Male ③1985 ④Ukraine, Energodar ⑤demonlight@i.ua ⑥Learning Japanese language ⑦Russian, English

①Melinik Elena ②Female ③1985 ④Ukraine, Zaporozhe ⑤alena.melnik@gmail.com ⑥Computer, Music, Japanese language & culture ⑦English, Russian, Ukrainian, a little bit Japanese

①Kraeva Victoria ②Female ③1990 ④Russia, Moscow ⑤vika_kraeva@mail.ru ⑥Movie, Television, business ⑦Russian, English



①Levedeva Marina ②Female ③07 Oct. 1985 ④Russia, Yoshkar-Ola ⑤Mariko-kun@mail.ru ⑥My hobbies are listening to music,

reading books, especially Haruki Murakami, Drawing sometimes. I like to know more about other countries and their cultures and people. And I like Japan! So I want to make Japanese friends. ⑦English and Russian

①Abramov Alexander ②Male ③1988 ④Russia, Tula ⑤dorian_grey2@mail.ru / cib890@yahoo.com ⑥Manga, Anime, Japanese food ⑦Russian



①Markova Maria ②Female ③1991 ④Russia, Moscow ⑤ledy-cat@mail.ru ⑥Vocal, Guitar, Travel, Pet, Diving, Sports ⑦Russian, English

①Uzenyov Iliya ②Male ③1990 ④Russia, Barnaul ⑤attair@mail.com ⑥Music, photos, films, history, playing the guitar, the flute, sax etc., dance ⑦Russian, English

①Panteleev Vitaly ②Male ③1990 ④Russia, Kurgan ⑤granitmail@gmail.com ⑥Music, guitar, anime, robots ⑦English, Russian

①Popova Evgenia ②Female ③1986 ④Russia, Monchegorsk ⑤TrashtaBars@yandex.ru ⑥Sports, reading, Japanese culture ⑦Russian

①Belousova Anna ②Female ③1975 ④Russia Tula ⑤prapor_tula@mail.ru ⑥I write children's books. ⑦Russian, English

①Lizhiev Anton ②Male ③1992 ④Russia, Elista ⑤rasenq@gmail.com ⑥swimming, Japanese culture, anime ⑦English



①Isakova Yana ②Female ③1991 ④Russia, Nizhniy Novgorod ⑤alasia23@yandex.ru ⑥Sports, painting, reading, cycling. I'd like to study Japanese language & to go to Japan! ⑦English, Russian

①Bureev Stanislav ②Male ③1937 ④Russia, Ivanovo ⑤archer937@mail.ru ⑥Cycling, Photos ⑦English, Russian

①Sidelnikov Igor ②Male ③1987 ④Russia, Kotlas ⑤osgorad@gmail.com ⑥Sports, Martial arts- kick boxing, Karate. Asian film. I started to study Japanese. ⑦Russian, English & Japanese

①Nikita ②Male ③1986 ④Japan, Okayama ⑤hiyori.amatsuki@gmail.com ⑥All about Japan, Tennis, Yoga, etc. I try to study the Kansai dialect ⑦Japanese, Russian

4~7月の予定

4月 5日(月) JIC 東京 ロシア語講座 前期スタート!
 4月 12日(月) JIC 大阪 ロシア語講座 前期スタート!
 4月 13日(火) JIC 東京 日本語講座スタート!
 5月中旬 JIC 東京 ロシアンフェスタ
 6月 5日(土) JIC 大阪 ロシアフェア 13:00~17:00
 6月 12日(土) JIC 東京 留学相談会(予定)

最新情報は JIC のホームページに

随時掲載いたします。ご確認ください!

JICは頑張る人を応援します!

◆◆編集後記◆◆

三寒四温が続いていますが、みなさま体調を崩したりしていませんか? 花粉にも毎年悩まされていますが、今年は少し楽な気がします。気のせいでしょうか…。昨年 of 新型インフルエンザ流行以降、ずっと外を歩くときはマスクを着用しているのですが、それが花粉症にも効いているのかもしれませんが。今号以降、しばらく JIC インフォメーションは年 4 回の発行となりますが、みなさま引き続きご愛読ください。次回は 7 月号です。お楽しみに。(JIC 大阪 小西章子)

外で過ごすのが心地よい季節になった今日この頃。次は何の種を蒔こうかなんて考えながら花壇の手入れをしています。ふと見ると、昨年植えたプラムの木に小さな白い花が三厘付いていました。私達と同じように、木々も季節の移り変わりを確かに感じているようです。(JIC 東京 白井真理奈)

* * JIC のロシア語研修 * *

ロシア長期留学 9 月生・募集中

【期間】2010 年 9 月より 10 ヶ月

【締切】2010 年 6 月 15 日

モスクワ国立大学 482,000 円 (授業料 10 ヶ月)

サクト・ペテルブルグ国立大学 520,000 円

(授業料 10 ヶ月)

ウラジオストク極東大学 310,000 円 (授業料 10 ヶ月)

* 上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金及び取得手数料などががかかります。



ロシア語個人研修 (随時募集)

☆モスクワ・ダリパス社 1 週間~4 週間 (ホームステイ 3 食付)

☆モスクワ大学 3 週間~長期 (大学寮 1 人部屋)

☆G & R インターナショナル 1 週間~長期

(ホームステイ 2 食付/大学寮 2 人部屋)

☆ペテルブルグ・パートナー社 (ホームステイ 2 食付)

☆ペテルブルグ大学 1 ヶ月~長期

(大学寮 1 人部屋/2 人部屋)

☆ウラジオストク極東大学 1 週間~長期 (大学寮 1 人部屋)

☆ウラジオストク極東大学 1 週間~1 ヶ月 (ホームステイ 2 食付)

☆ビジット生活体験コース (ホームステイ 3 食付)

ロシア語グループ&個人研修 (随時募集)

リデン&デンツ スイスの会社出資のロシア語学校。

個人・グループレッスン。モスクワとペテルブルグにあり、インターナショナルな雰囲気。初心者より上級者まで。2 週間より可能。基本はホームステイ 2 食付。詳細はパンフレットをご覧ください。



デルジャーヴィン・インスティテュート

全ロシアプーシキン博物館の協力により設立された学校で、18 世紀の建物内で授業が行われます。アットホームな雰囲気でお勧めです。グループレッスン、1 週間より可能。基本はホームステイ 2 食付。詳細はパンフレットをご覧ください。



◆ロシア留学旅行相談 (東京・大阪各カ所) ◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。お気軽にお越しください。

東京事務所 平日 10-18 時 土曜 10-16 時

大阪事務所 平日 10-18 時 土曜 (6-9 月のみ) 10-16 時

留学・研修各種パンフレットは JIC へご請求ください。留学・旅行相談お気軽に!

~Jクラブ (JIC 友の会) のご案内~

JIC インフォメーションを年 4 回、また JIC のイベント案内をもちろんお届けします。ご希望の方には入会案内をお送りいたしますので、ご連絡ください。会費は無料です。
 国際親善交流センター